

1923年 (大正12年) [19歳]

「辰雄日誌1923」No. 3 (1)

—— 1923年8月22日～9月30日 ——

小池辰雄

○1923年8月22日 (水)

晴、^{しばしば}驟雨。^{しゅうう}来月の今日は、長兄が逝かれてから満2年になるのである。終日、謹んで過ごす。お墓参りに行こうと思っっている中に雨が降って来て、家でお参りするの已むなくされた。小さな花をお供えた。ローマ書7章、8章の兄上の筆跡〔英文〕があつたので、これをこの日記帳の巻頭に張りつけることとした。真摯なる信仰の結晶である。兄上が僕のために書き遺して逝かれた最も貴きものは正にこの2枚の紙片であろう。兄上のこのペンの跡に導かれて僕は堅く歩まん。何とその一字一字に生命の溢れて居ることではないか。

○1923年8月23日 (木)

晴。昨夜晩く、山西の叔母様をお伴れして西島様に行った。政矣さんから聞いた石神井水泳場へ今日は早速出掛けた。午後4時近くに着いた。それから5時半まであこがれの遊泳を思う存分することが出来て愉快だった。帰りの車中はぐっすり寝て、もう来たかと思う位であつた、池袋に着いたときは。プールの広さは100mに20mである。水はさほど冷たくなく、また濁りもそんなではないので、プールとしては好い方である。子供が多い。上手な奴も3、4人居た。

○1923年8月24日 (金)

晴、夕立。午前は家に居た。今日は随分蒸す。午後からまた泳ぎに行った。家から市ヶ谷まで15分、山手線の中が約30分、池袋武蔵野線駅で待たされること20分、武蔵野鉄道が30分、駅から水泳場まで10分。相当かかった。2時少しばかり過ぎとなった。それから4時半まで泳いだ。早拔手で200mを続けるとかなりの運動である。やはり片拔手の方が続く様である。クロールのうまい奴を見ると羨ましくなる。練習したくなつた。近頃は競泳のための泳ぎの様で、平体が大流行である。横体で悠長に泳いでいるものは居まい。

昨日、山西の叔母様が親類の方のところに行かれたが今日、佐久男さんと一緒に来られた。夕方、宇都宮から兄が出て来られた。飛脚の様である。明日の夕方は帰宇されなければならない。姉の病状見舞が主たることなのだろう。陸軍大学の試験準備に忙しいところへ、家事の方も相当あり、その上、隊では将校不足、一人で三、四人の仕事を兼ねなければならぬと云う始末で、内外事務多々あつて全く御気の毒である。而してこれを切り抜け得る



気力、体力の有ることを僕は喜び且つ敬服する。僕もまた奮闘の兒でありたい。

○1923年8月25日 (土)

晴、夕立。高等文官試験を受けられた実様、今日一寸来られた。東京の苦熱と闘いつつ、彼の猛烈なる勉強をされ、首尾よく試験を果たされたことは誠に喜ばしいことである。彼実様の気力と体力に敬服する。痩せこそされたけれども、困憊の色など見えず、本当に偉いものだ。長兄の高文試験受験当時が偲ばれた。僕もやがてはこの苦しみを嘗めねばならぬ。さらば僕も体力を盛んならしめん。

官吏にならんとすれば、何人此の試験のためにかくまで痩せる辛い思いをしなければならぬ社会とは驚く。競争は何処でも烈しい。競争、競争で頭を悩ます現代人。金、金で頭を悩ます現代人。その中には過ぎ行く。やがて生涯は終りに近づく。そして死の断崖を眼のあたりに見て初めて、嗚呼！と嘆息するのか。人生は社会を相手に、人を相手に、物質を相手にしては竟に夢と嘆息で終るだろう。

天を仰ぎ見よ、自然に教えられよ。永遠を望め。神なり、神なり。汝等は生涯苦しんでも神を知りて信ずれば、それが何より大なる成功である。神在^{いま}して、人の社会に処して初めて意義あり、生命ありである。

○1923年8月26日 (日)

晴、雷雨。上野ステーションへ山西の叔母様を見送りに行った。帰途、青木へ行く。一高前を通ったとき、今日の対三高の試合の見物人が既にぞろぞろと入り行くには驚いた。9時半である。試合は3時から。青木には四郎ちゃん、泰ちゃんが居た。お昼は好きなお赤飯であった。食後、直ちに試合を見に行った。既に満員である。よい場所がない。人と暑さで耐え兼ねて途中で帰って来た。相変わらず非常な暑気である。一高三高の野球戦ほど熱のあるものはない。満都のファンが蝟集するとは文字通りである。会社員も銀行員も職工も学生は勿論、実に驚くばかりの人である。白、紅の旗幟に太鼓は昔ながらの盛観である。6回目まで2対2、大接戦。雷雨に襲われてドローゲームとなった。

10時頃、明月皎々と照って、散歩に出掛けざるを得なくなった。今日は月食の晩であったが、丁度その間、曇り続けて見えなかった。気象台でも無^{さそ}氣を揉んだことだったろう。

『聖書の研究』8月号を母上に読んで差し上げた。大いに得る処あった。内村先生の言われることは、どうしてこんなによく僕の心に適うのかと不思議な様である。僕には小説(現代流行の)なんか嘔吐^{はきけ}氣を催すものである。大手町の会合が待たれる。

○1923年8月27日 (月)

晴、十六夜の月。快晴の好天気である。午前10時頃、武田のお家へ遊びに行った。宣ちや



んは真黒になっていた。午後0時半、二人は僕の発言で石神井へ泳ぎに行くことにした。実は家を出るときからそのつもりで水禪と手拭を濡れ袋に用意して行つた。青木の二人を誘つた。池袋で彼等と落ち合った。石神井へ着いたのは2時少し過ぎであつた。1時間半ばかり愉快に泳いだ。雲がないため日はカンカン照り続けて泳ぐには絶好であつた。帰りの汽車は相変わらず眠かつた。随分お腹が空いたので夕飯は美味しかった。明月の今夜、また出掛けずには居られず、お堀りばたへ散歩に行つた。帰つたのは11時であつた。

○1923年8月28日 (火)

晴、夜雷雨、十七夜。午前、家の中の整理をした。姉は寝ているから僕のほかするものがない。久しく勉強をしないと、なかなか手に付かないものである。頭も使わないと鈍ってくる。休息もほどほどである。昨日今日は非常な暑気である。今日は水風呂に3回入つた。坐つて汗が沁みでる。午後4時頃出掛けて中野なる山本のお家へ行つた。玄関で隆さんが遊んでいた。それから縁側に居る富美ちゃんの姿が見え、次いで仙台のおばあさんの横顔が眼に入った。

姉様が相変わらず働いて居られた。一人の手で、病弱の義兄と三人の幼児とおばあさんのために一切を働いている。僕は感服せざるを得なかつた。おばあさんは頭が古い。命令は必ず遵守せねばならぬ。義兄も大分無理を言われる様である。それにも従う。それから手にかかる三人の子供であるから、休息の間がない。神は、有難くも姉様に健全なる身体を与え給う。故に、山本家は立つて行く。その貴き姉上が病まれたらどうだろう。それと思うと涙が出る。また、三人の兒は澆刺^{はつちう}たるものである。故に姉様もまた助かる。手が行き届かない子は返つて此の如く丈夫である。神はよくなし給う。ちやはや大事にやれ何だかんだと言つて育てる兒に丈夫なのは居ない。此れは真理である。神の思し召し給う以上に親が心配して、かれこれ人愛を施すからである。誠に親は何を食わせん、何を着せんと思い煩うこと勿れである。そこに人愛は、余計、無益、否、害さえ存するのである。彼等三人の兒は幸福である。

姉上の健康のために切に祈り奉る。また一家の柱石なる兄上も健全な身体所有者となつて、姉上とよく和して、たのしき人生を送られんことを祈る。妻を下女視するのかわと思われるほど命令し勝ちな日本人の夫の癖、因習は甚だよくない。

今日、車中「伝道之精神」を読んで励まされる処があつた。

「憂つる勿れ汝朴訥遲鈍の青年よ、汝は常に俊才伶俐の人に愚者として疎んぜられ、汝の世事に長ぜざるを以て不用物として見做さるる事あり、而も全能なる智慧は却つて汝が如き者を求め、汝をして人間の思想の達し得べからざるの智慧と希望と喜悦とを有せしめむと欲す。」

誠に歴史上の実験よりする真理なり。



「大宗教家は^{れいり}伶俐なる人に^{すく}慚くなくして却って朴訥^{ぼくとつ}なる人に多し。」である。

僕の最も好む色は青である。青は大海の色である。青は大空の色である。青は山の色である。誠に青は宇宙の色である。青色は僕は真理の色と信ずる。真理の色、真の色、これは青である。故に僕は青鉛筆を用う。サイドライン、アンダーラインに青色を用う。聖書、宗教書等すべて真理を教えてくれるものに青色を付す。心の奥底から、然り！然り！首肯するときこの青線が染められざるを得ない。

青、何と落ち着いた色ではないか。温和なそして底力のある、厳肅なこの色を描いて如何なる色が、天然の真、宇宙の真を表示するものぞ。

青は厳肅の度を増して黒となり、その栄光の輝きを増して白となる。この真理の黒なる極端と、白なる極端は一つと見てよきなり。その性質は異なろうともその「真」なる元に於て一つなり。

兄上が青を最も好まれた。何日だったか、兄上が

「辰雄は何色の色鉛筆が好きだい？」

と問われたときに、僕は

「^{コベリ}紫色ののが好きよ」

と答えたとき、兄上が

「僕も始めは紫色だったが今は青が一番好きだ」

と言われた。それより後、僕も何となく青が好きになり、落ちついたじみな青の特性を認める様になって来た。そして、兄上の青を好まれる心持が読めて来て、自分もその心持に成つて来て青を好むことはいや増して来た。

故に兄上のサイドライン、アンダーラインは青である。僕のも今は全く青である。兄上の本箱を見る。総て良書で充たされている。兄の好まれた書は一つ残らず僕の今好む書である。同心町の二階にこの本箱の置かれてあった昔が非常に懐かしくなつて来た。その頃僕はこれ等の書の如何なるものであったかを知らなかった。ただ毎日毎日この本箱は僕の眼に映っていた。

一枚の硝子を通して、清き美しき良書は金の瞳を以て毎日毎日、僕に何物かを教えてくれたのであった。しかし僕は知らなかった。良書が沈黙を以て僕を見て居た。そして僕が彼等と語るときに至るのを忍んで耐えて数年も待つていた。

今日この頃、彼等との交渉は日に日に繁くなつて来た。彼等は最良の友である。人の友より豊かなる友である。彼等の言ってくれることは尽きざる味がある。

兄の書は悉く僕の書である。兄のブルーラインはまた僕のブルーラインである。また僕の書は兄の書である。僕のブルーラインはまた兄のブルーラインである。兄と僕は一心一体である。兄の続きが僕である。兄は僕に宿る。故に僕は兄の肉体を見ずとも寂しくない

のである。兄の強健なりし身体と、絶倫なりし才能、精力と来たりて、僕に宿れかし。それよりも更に更に兄の信仰、敬虔なるその信仰の心、僕の心となれかし。

山本の姉上、心尽くしの御馳走、有難く頂戴した。美味しかった。富美ちゃんが大きくなった。負け厭いで隆兄さんと喧嘩をする。兄さんたちが柱に攀じ登れば、富美ちゃんもその真似をする。夕飯後、縁側に納涼していると、十七夜の月が生垣の向こうに火の球の様に、赤い団子の様に、団々たる姿して昇つて来るのを見た。奇観である。妙景である。何だか月の様な感じがしない。化物の様である。赤と言っても至極うすきみの悪い色である。その中に次第に非常に光を発し赤色は青白の光へと移り行き、銀光がよよに鮮やかとなつて来た。

8時半、お暇して、独りお月夜の散歩をした。中野で途中下車した。昔とその趣の異なっているのに驚かざるを得なかった。昔を忍ばんとして能わなかった。市ヶ谷駅に着いたのが10時近くであつた。暑い夏の夜、歩くと汗が発る。帰宅して、シトロンで渴を癒したときは格別であつた。11時消灯。

○1923年8月29日(水)

晴、雷雨。夏は未だ去らない。むしむしと暑い。午前を読書に費やす。人は宗教に依つて生く。何だのかだの言つて居ても結局、嘆息に終るは宗教に真剣に身を委ねない所から来るのである。今日、読書の必要を痛切に感じた。励んで、努めて読書せん。基督教は誠に実験の宗教である。どこまでもライフに最も密接なる関係を有する宗教である。そしてまた一方、読書を怠つてはならない。書から教えられることは実にまた大なるものである。

聖書を読むことを以て第一となし、それから大宗教育家の伝記、宗教に関するその他の一切の書、或いは歴史、或いは紀行、或いは事業等、読むべきものは実に数え切れぬほど多くある。良書のみでも到底読み尽くせるものでない。聖書と宗教書とは日々の欠くべからざる読み物である。霊の糧である。是等の数頁は少なくとも読まなければならない。読まざる間は、如何なることありとも床に就いてはならない。読まずして眠りに就いて心地悪からざるときは汝の霊は死に近しとなして可である。而して一方、英書と独書とは語学勉強のために必ず之また数頁は読むことを要するのである。8月29日、痛感。

○1923年8月30日(木)

晴。午前、少しばかり独逸語を読み、英語を多く読んだ。午後、暑いのでまた泳ぎたくなり、突如思いたつて石神井へ出掛けた。市ヶ谷で走り来る電車に乗り遅れじと疾走し、文字通り Catch the Car をやった。代々木乗り換え好都合、池袋着。15分で発車する汽車にのれた。総ては騎虎之勢、決断して勢いよくやることは此の如しと感じて、意気の貴さを痛感した。今日の午前、七ツナラベの独りトランプをやったときの気分がそうであつた。必ず「出る」



というインスピレーションがあった。非常な勢いが手に籠もっていた。そしてトランプはその如く出た。男は氣一つ。

3時から泳ぎ始めた。今日は水が普段よりも清かった、暖かった。話し相手なんか居なくて返って幸、思う存分泳ぎ廻った。クロールの練習をやった。日は西にかたむく。水は光る。一線の光波が漂うところを東より西へ真一文字に光を目指して泳ぎ切ったときの感じ。彼の Longfellow の Hiawatha 「ハイワサ、インディアン英雄」を思い浮かべて、我が胸は言われざる歓びに満ちた。そのときは、僕の外、泳ぐものは2、3人に過ぎなかった。これを最後として僕も水から上った。

石神井駅を発したのは、星々の空に瞬く頃であつた。み空の十二星座(白鳥)は最も淨き友の一つである。終生の友は彼れ、十二星座である。これが銀河系の中心と聞いて僕の歡びは更に大なる心地がする。

休暇もあと一旬で終りを告げる。汝に感謝する。わが望みの通り、我を育み健全になしくれしことを。更に感謝す、汝は我が身体のみならず、靈にも糧を供して、我が靈をより醒めたるものとなしくれしことを。

高等学校生活は尚2星霜半ある。貴きはこの年月である。強健なる身体の願わくは我れに築かれんことを。独り主の嘉し給う器とならんために。

○1923年8月31日 (金)

晴。天長節。国旗を掲揚する。別に深くも考えないが、子供の様な氣持で嬉しさを感じる。午後、退屈でいる。母上が御用をお言いつけになる。退屈まぎらしと思つて出掛けた。玉川駒沢新町なる藤井武先生の御宅へである。兄上の『天の使』のことで。お留守であつた。書き遣いて帰つて来た。あの辺は空氣がよい。夕方になると涼しい風が畠や森を通して吹いて来る。夜、斎藤様の御家へ遊びに行く。色々の御話を伺う。レン子様とお母様は本當に仲がよい。レン子様は幸であるこの御両親あつて。

男は腹であることを斎藤さん自身から自然と教えられた。先生の講義などよりも其の人に接して生きた教訓を得る方が遙かに勝っている。

自分から吸い取つたものでなければ身の益となるものでないことは益々、明らかとなつた。母をお伴れして散歩に出た。月が東天に懸かっていた。涼風が面を払ってくれてよい散歩だった。

……「英文省略、内村鑑三の言」……

○1923年9月1日 (土)

晴。今朝は蒸す様な嫌な氣分のする朝だった。何すともなく家に居た。からつと晴れていたら、忽ち泳ぎに飛びだしたことだったろう。蒸す様な天氣は返つてそのために幸だった。



と云うのは、正午(11時50何分)から突然突発した大地震〔関東大震災〕があったからである。丁度、これからお昼御飯を戴こうというときであつた。ガタガタガタ、「あつ、地震」「何、大丈夫」と落ち付いていたが、次の数秒には、地震の大波で、柱がみしみし。隣の家の瓦が飛ぶ。唐紙が外れる。小箆箆が転落する。大変な動揺である。そこで、一旦は庭へ降りんとした僕、これは大変と、母上の御手を握って、よろめきよろめきして、やっと台所へ来た。裏から通りへ出たときは、大地震はその後震へ入るときであつた。崩れる程の家だつたら、その下敷きとなつて死んでいたのだらうとあとから考えて驚いた。生まれて初めての大地震。たしかに恐ろしかった。母、姉、孝さんは斎藤さんの方々と一緒に、3、4時間、街道にごぎを敷いて居られた。僕もぶらぶらしていた。家の中に入るのは、流石にこわかつた。しかし、お腹が空いたので、おそろおそろ2時頃、入って食した。

震動は断続的であつた。夜は街道に明かした人が多かつたが、家では12時すぎにとうとう家の中に入つて、寝た。しかし誰も熟睡などは出来なかつた。「がたがた」と鳴れば、すぐ飛び出るといふ風であつた。家の中は、ざらざらであるが、瓦は殆どずらなかつた。落ちたり欠けたりしたのは一枚もなかつた様である。平屋の堅牢な造りの有難さを感じた亡兄の形見なる大本箱の硝子戸が一枚破れたのは残念だったが、一枚でよかつた。南北に主として震えた見え、東西に長く面して置かれたものは、比較的安全であつた。柱時計が止まつては動き、止まつては動きしたと見えて、後になって見ると2時間ほど遅れていたのはおかしかつた。

神経が立つて安眠どころではなかつた。火の手が所々で拳がった。士官学校が消失した。しかし、士官学校だけで、町の方へ延焼しなかつたのは実に幸なことであつた。不幸中の大幸であつた。町へ延焼したら、南風であるから、牛込は火炎に舐め尽くされてしまつたらう。それは明らかである。これを思つて、牛込の人々は後になつて、本当にその鎮火の有難みが解つたのである。(数日後記す)

○1923年9月2日(日)

晴。炎々たる焰が東方に見える。黒煙は所々に濛々と立ち揚がる。地震は折々人の胸をさわがせる。人は皆、戸外に出ていた。夕方、宇都宮から兄が帰つて来られた。火の手の形勢不穏なため、夜、母上をお伴れして武田へ一時、非難おさせした。同じく姉上を兄上が伴れて武田へ行かれた。兄と僕とは家で、いざという時を待っていた。しかし、幸に火は牛込台に移つて来なかつた。東北から南にかけて一面火の海である。その空は反映して紅の海である。雲も紅く染められその間から、星の光の見えるのはこれ誠に奇観であつた。夜の警戒は実に物々しい。鮮人や不良分子の放火のための備えである。



○1923年9月3日 (月)

曇。早朝、兄上、お午の握り飯を携帯で所要のため帰宇された。食糧欠乏をおそれ、副食物を沢山買いに行つた。店は、品切れ品切れである。缶詰はただ一つより得られなかった。夜は、提灯持ちで夜警である。放火と地震で人心恟々である。

○1923年9月4日 (火)

晴、驟雨。睡眠不足で、身体がしつかりしない。黒煙は未だ絶えぬ。流言蜚語が盛んで、確報がわからない。東京は火の海である。鎌倉、大磯、伊豆伊東、熱海の辺、箱根まで、災害は不可測なものである。東京市民の死傷者、数十万人ということである。火のために焼死したもの、火に追われて隅田川に水死したもの、地震のために圧死したもの、数知らずである。惨憺、惨憺、また惨である。

○1923年9月5日 (水)

曇、驟雨。随分、暑い日であった。安政以来の大地震。その災禍は甚大である。この地震で大混雑の際、内閣が急造された。山本内閣である。瓦解のまた速やかならざらんことをのぞむ。

母と姉が宣ちゃんに伴れられて帰宅された。山西の叔父様がお見舞に信州から来られた。佐久男さんも来られた。見舞の客が来られる。不自由な母と、病体の姉が居ることとて、変があつては誠に困るのであるが、幸に無事で何とも感謝に堪えぬ次第である。

○1923年9月6日 (木)

曇、驟雨。新聞で吾妻の伯父様が鎌倉で震害に遭つて、梁に圧せられて無惨にも逝去せられたことを知つて、驚愕の至りである。伯父様は、家のためには父の如き恩人であつた。悲しみの至りである。

「由比ヶ浜山階宮御用邸にては武彦王殿下は追浜へ御出張仲にて同妃佐紀子女王殿下は御懷妊中とて吾妻博士を召され階下の一室に御母君賀陽宮大妃妙子殿下侍女等列座拝診仰せつけられている最中に大地震あつたため建物崩壊し佐紀子妃殿下、侍女、吾妻博士は打ち重なつたまま押しつぶされ無惨にも、梁に圧せられいたわしきかぎりの御最後を遂げさせられた云々」(日日新聞)

とあつた。早速、御悔やみに、吾妻の伯母様の御家へ参上した。

同心町の旧き家を訪えば、無事でいた。同心町はなつかしきところである。家の前の前田という家の人々も無事でいた。久しぶりで遭つて、互いに嬉しかった。佐野さんのお家へこの夏のお礼にあがる。帰途、春日町なる尾田先生のお留守宅をお見舞した。一丁位しか隔つていない所まで火が来ていたこととて、さぞ混雑せられたことであろう。無事に焼



かれずに済んで本当によかった。渡欧中の尾田先生、この報を知られて御心地は一方ならざるも、お家の方々御一同無事で何よりである。

水道橋へ出れば焼跡、惨憺たるものである。未だ余煙の立ち上っている所がある。神田の方まで見通しがきくとは驚くばかりの変である。一朝にして廃墟と化したのである。

「ローマは一日では出来ぬ」とは、今日の東京の有様である。軍隊の夜警嚴重で、我々の心もやつと安らかである。戦闘状態にある市の観がある。非難民は陸続として山の手方面へ行く。そのみじめな有様、すべてが言語に絶することのみである。

我々の幸福は如何ばかり感謝するも及ぶところでない。水道が通じないので、水は井戸のある家へ貰いに行く。これが不便である。しかしこんなことも何でもない。電燈は今晚から点きはじめた。人心も辛くも落ちついて来た。

○1923年9月7日 (金)

曇後晴。兄の誕生日。連日の睡眠不足で頭が重く、ふらふらする。身体はだるい。やはり丈夫な身体を有っていることは本当に大切なことである。吾妻様では正勝さんも片瀬で亡くなられたとのこと、何ともお気の毒な次第である。四郎ちゃんが来られる。昨日から電燈はつきだしたが、水道は未だである。「東京の大火の地図のスケッチあり」

○1923年9月8日 (土)

晴。蒸し暑い日である。身体の具合は余りよくない。四郎ちゃんが水汲みの手伝いをしてくれた。食欲は相当ある。大地震、大火災が起こってから一週間は過ぎた。東京は勿論未だ、混乱、混沌、困窮状態である。人心も、混沌、惑乱の状態に居る。要するに「大さわぎ」「大こまり」で時は過ぎ行く。

禍なる哉、この大地震。しかし、この大地震に心あり、深意あり。文明の東京は如何なる東京であったか。東京の人心は如何なりしか。日本の中心なる東京の人心は如何であったか。彼等の求むる処は何であったか。彼等の日常生活は何によつてなされていたか。物質文明の汁に酔うては居なかったか。思想、思潮は如何なりしか。噫、混沌の二字に尽きては居なかったか。仮に書店店頭に立ちてその雑誌類を見よ、その文字のおわるところ空を見ざるや。

どこに確乎たる信念のもとに熱心に、易らざる主義を解くものありしや。その言うところ皆、一時の花火なり。ぱつと世間にその姿を現わして、世間に容れられ、はやされて、時のあゆみにやがては踏み消されて、跡形もない。何々主義、何々運動、何々事件、ことごとくこれ、シャボンダマと等しき運命。易らざるものを瞻よ。旧くして旧からず、常に新しき生命に充つ。東京市民、日本の中心たる市民は、空の星一つを静けき心にて、真面目に5分間仰ぎ瞻ば、救われたるなり。と僕は断言す。すべての禍の本はその心なりき。



○1923年9月9日 (日)

晴、夜雨。安息日来る。近所に聖会あつて讚美歌の声の聞こえたのは意外だった。彼等は教会を失つて同志相集つて集まりをしたのだらう。基督者は居る。惑乱の人心を静める讚美の声はある。これを聞いて嬉しかった。

僕は一人であつた。大手町を思つて涙がこぼれる。内村先生は何処で集まりをされるだらう。柏木であらう。何処だつてそれはよい。しかし、あの大手町が焦土と化したのはやはり残念なことである。

先生はこの地震に遭つて益々、基督教を説かれることと信ずる。鮮人、赤化者——社会主義者——の禍は本、いづくにその罪を有するや。これは我々日本人である。日本人の心である。もはや、嘔々したくない。罪は我々自身である。救は基督教のみである。

地震も火災も、神の聖旨と知り奉つて、感謝である。このことを悟らしめて戴いたことは僕が今回、火災の害を蒙らなかつたことより遙かに感謝なことである。多くの人々は惨憺たる憂き目に遇つた。彼等は誠に気の毒である。彼等は天罰にあつたとは決して見ない。我等も天罰、天の誠を蒙つたのである。彼等は大いに救つてやるは我等の欲するところ、また義務である。我等も同じく罰、天の御怒を蒙つたのである。誠に物質的には比較的蒙らなかつたにせよ。心には同じく蒙つたのである。我々は生命をたすかつたが故に幸福であるとは決して言えない。我等もまたあわれむべき大罪人である。贅沢の罪、傲慢の罪、人心浮薄の罪、その高潮に達せんとする、あぶなきあぶなき東京は地震によつて救われんとしているのである。

今や、正に巨星の日本に出現すべき秋である。然れども巨星一つ、出現して日本は救われぬ。小さき一人一人が醒めんとし、求めんとして、巨星出づれば、そのときこそ日本は救われるのである。

第二の東京建設計画に必要なり。急務ならん。然れども然れども。第二の東京市民心の改造こそ最も必要にして、最も急務なり。

人は文明にたよつて遂に自滅のみ。文明はこれ自滅の途である。人はやはり人に戻らざるべからず。人の求むるところは外にあらず、内にあり。人の求むるところは物にあらず、心にあり。霊は、精神はすべての本である。精神なき文明ほど危険なものはない。基督教は永久に動かざるものなり。基督教にのみ救と栄とあり。

○1923年9月10日 (月)

晴後雨。午前一寸、晴れて居て雨であつた。秋も本来に來たのかと思われる位涼しかった。非常に気持のよい日であつた。相変わらずの東京の気分で落ちつかなかつたが、夜は、よく落ちついて、母上に『聖書の研究』を読んで差し上げた。



○1923年9月11日(火)

晴。昨日の秋もまた夢のあと、今日は90度〔約33.3℃〕に垂んとする暑い日。ことに夜の寝苦しかったこと、言語道断。

リンカーンの伝記を繙いて、これで養われし昔の心が思い出されて、またその純に帰って、真面目な辰雄に帰った。霊は善き糧なくば、悪しき方へと腐れて行くものである。

大地震以来、心の落ちつかないというのは、本当の僕に立ち返って考えて見ると、「非」であるべきことである。大恩恵、大訓戒を下されて、心の落ちつかずというのは余りに小さいではないか。東京のごたごたが何である。食糧問題が何である。目指すところは上なり、易らざるなり。どこまでも「彼」のために、「彼」を慕いまつりて。

○1923年9月12日(水)

晴。暑い一日。毛虫退治をする。跳梁跋扈甚だしく、これを殲滅するのには容易でなかった。

喬さん、宣ちゃんが来られた。寝ころんで話した。宣ちゃんも同じく近頃は、勉強も碌にしない。惰け者の生活をしていると言った。水戸へ行くのは、我々のためよいことに違いない。汽車に乗れる様になることを待つ。お使い歩きと雑役であとの一日は過ぎた。母上と姉とは、僕は何やかやと使われざるを得ざるわけである。用は、次から次へと出てくる。しかし、すべて潔く為るのが最善、最幸福の手段というものである。健康体で働けるほど有難いことはないのである。この秋の我が身のために十分の収穫を齎してくれんことを祈るのである。我が身のためとは、我が人とならんためというのと同じである。

人、それは神の人である。

汝は小海、内海、静海を渡る小舟には非ざるなり。

汝は大海、大洋、荒海を渡る大船なり。

而も汝は驕ることをゆるさざるものなり。

大船も小穴より沈む憂いあり。

人多き人の中にも人ぞなき、人となれ人、人となれ人。

汝の土産は汝の生涯そのものなり。神はこれのみ受け給う。汝の位に非ず、富にあらず、名誉に非ず、著作に非ず、汝の言にも非ず。汝の真心なり、働きそのものなり、額の汗なり、汝の生涯そのものなり。

○1923年9月13日(木)

晴、夜雨。午前、壁の紙張りをする。倉島久子さんが今日から家に来られることとなった。おとなしい、すなおな方である。薩摩芋が美味しくて、つい過食をしてしまった。午後、武田までお使いに行く。1時間ほど皆とお話して帰った。食物も大分復旧した。

夜、兄上が帰って来られた。しかし、夜間勤務で再び軍隊へ帰られねばならなかった。



蒸していたのはザァーッと降る雨で払われた。よき気持になった。

亡き兄上の御命日が近づいて来る。満2年に垂んとしている。その間の世の中の出来事は様々であった。多く教えられたこと、解ったことなどある。貴かりしは兄の死であった。あわれなるこの身の御救いにあずからんことを祈り奉る。

○1923年9月14日 (金)

雨。男性的の雨が夜半から降りつづけていた。地震のため瓦がずって、所々に漏れを生じた。しかし気持のよい雨である。霽はれ間まを窺うかがって、屋根へのぼり、大修理を行った。初めて瓦屋の真似をして、知らぬ新知識しんしきを実得した。かなりの運動にもなり、お昼が美味しく戴けた。水をかぶって暑さを抜いた。驟雨しゅううの襲来しゅうらいは屢々しばしばあった。

兄上が午、一寸、帰って来られた。勤務区域が北町から若松町までとのことである。

明日、帰水することに定めた。学校生活へ戻ることは、やはり我々学生にとつては最もよい適したことなのである。規則正しき生活をなさんと慮おもるところがある。手の少ない家ではどうしても雑役に使われる。我が範囲外のことおもに氣を使う。これは最もよくないことである。明日からの生活が待たれる。

○1923年9月15日 (土)

雨。起床7時、天候險悪で少なからず迷ったが、一旦決意したこととして出発と定めた。幸に出掛けるときは降って居なかった。万世橋行に乗り、それより巣鴨行に乗り換え一高前で下車、日暮里に向かった。歩いて行くつもりだったのが、案外に電車の利用が出来たので予定より早く着き、11時発車までに約1時間を余していた。思いの外混まず、腰掛けることさえ出来た。車中、豪雨すじぶ頗りに降り、涼しき旅であった。着水の時間も遅れず、雨は丁度霽れ上っていて、傘を持たぬ僕には好都合であった。水戸市も何となく平常と異なり、悲惨の余風はここにも仄かに漂しんかんうていた。寮へ行ってみると、灯火りやうりやう寥々、家内森閑である。聞けば生徒は未だ三分の一に達して居ないとのこと。

天災は東京方面のみならず、その地の天災でもある。日本の天災である。日本人への天災である。人の心を震撼せしめた地震である。物質上の復旧復興、之も大切であろう。しかし、人心の覚醒なくしては竟つひにその巧は空しであろう。

日本の中心たる東京市民の覚醒、それは東京市建築物、道路、防火設備その他百般の施設に対する改革の為の覚醒に非ずして、その根本たる心の覚醒である。滔々とうとうとし底止するところを知らざる悪思想、奢侈しゃし、贅沢、浮薄、放縱、この根本的根絶である。それはただ真面目に帰るの一事である。

東洋道德、それはついに縄である。永遠の望みを生命に生きる自由はどこにある。本当の仕事が之では出来よう筈がない。物質文明の進歩は如何に発展し行くと、ついに之破



滅の途に過ぎない。人心の平和は遠ざかり行くのみである。
規律正しき生活。

僕の心と身体に最も大切な要件は規則正しきこと、これである。学校生活に帰ったに当たって、ここにそれを定め、硬き決心の下に断行せんとするのである。この秋ぞ誠に望み多き秋なれ。身体の基礎をここに築かずんばあらず。

今なり、今なり、との声は聞こゆ。母上よ、兄上よ、我がために祈り給え。雄々しく立たん。神の嘉し給うプランのもとに、神よ、弱きこの身を守り給え。

リヴィングストーンの健康、グラッドストーンの健康、ルーテルの巨軀、リンカーンの巨体、何が是等を作りしか。彼等が敬虔^{けいけん}なる敬神の健全なる労働に非ずして何ぞ。この貴き道を知らしめ給え。

“Daily strength for daily needs” [日毎の必要のための日毎の強さ]

起床 6時半より7時まで。冷水摩擦。

登校 8時5分前。

於学校 学ぶときに学び、遊ぶときに遊ぶ。

昼食後休憩 30分、新聞一読。

放課後 1時間乃至1時間半の運動、隔日入浴。

夕食前 (復習30分)

夕食 6時頃、食後30分の休息。

独逸語 1時間半 (予習30分)。

英語 30分。

聖書、宗教書、書翰、1時間半、日記。

就床 10時半より11時まで。

この日課中、最も為さざるべからざることは、

起床 6時半～7時。

冷水摩擦。

“Daily strength”だ。

運動 1時間。

独逸語 1時間半。

聖書、宗教書、日記、書翰、1時間半。

午後9時の祈祷。

就床 10時～11時、早きほど宜し。

これはこの規則に縛られて為すに非ずして、勇んで規則を持ちつつなさざるべからず。規則は従にして、我れが主なり。規則は遂に規則に非ずして我が習いとなるべし。而して真に喜ばしき効は得らるるなれ。

間食をなさざること(已むを得ざる場合を除く外)。紅茶の代わりにオヴァルティン〔粉末麦芽飲料〕を呑むこと。Eat not to dullness.〔鈍くなるまで食べるな〕、節制、以て身体を重んぜよ。

○1923年9月16日(日)

晴。起床7時半。安息日は朝から。ゆるやかな気分である。午前、友達に来て、共同生活をしている故、如何とも為がたく聖書を読み得なかったのは残念であった。気がおさまらない。午後から詩篇と『宗教と現世』とを読み得て、安息日の有難きを戴けた。

夜はまた友達に来て、5、6人の話は相変わらず長かった。罹災者なる彼等の二人には同情の念起らずには居なかった。

○1923年9月17日(月)

晴。長き長き夏休みは昨日で全く終りを告げた。今日は第2学期最初の登校日であった。授業はちゃんとあった。40人中25人程の出席である。全校を通して最も出席者の多き級である。それ故、先生も普通に授業するのである。級によつては8人などというのがある。勿論、学校の気分には活気はない。惨害の余風はここにも漂っている。先生も生徒ものり気になれない。

第一学期の成績を見た。数学が赤丸かと思つていたがそうでなくて、幸にNo丸(ノウマル)であった。No丸が全級に9人とは大した成績である。しかし、本当に「彼は」と思う様な秀才、出来物は居ない様である。

運動しようと思うが、相手と道具がなくてついに出来ず、入浴したばかりである。

今晚も友達が桐寮に遊びに来たため、勉強は出来なかった。日課の通り果たせないことは残念であるが、独居ならぬ以上、已むを得ない。

○1923年9月18日(火)

快晴。死に至るまでエホバを俟ち望まん。我が信頼は、信仰は、之を極まりなき強きものとなし給え。

今日は秋晴れの実に心地よき日であった。

青、何と鮮やかな青い色を空は見せてくれたではないか。

光、何とかがやさしい暖かい光を日は放ってくれたではないか。

夜の星、夜の月、夜の虫の涼しき声、秋は来た、秋は来た。

静か、和らぎ。全天地はこれで掩おおわれている。

「秋の夜長がを鳴き通す、アア面白い虫の声」である。こんな音楽に勝るものはない。天の授け給うものに劣はない。いつまで聞いても飽きることはない。心は落ち着くばかりである。こんな環境に居て勉強しているとは何と幸福な身ではないか。今晚は殊に身の入っ

た勉強が出来た。

9時の祈祷は御恵深きものであった。亡き兄上の「祈祷の時」である。彼も天にて僕のために祈り、慶んで下さったろうと信ずる。兄と僕との手は永久に繋がっている、離れない。相共にいる。これでこそ、歓びの生命があるのである。何が感謝とて、歓喜とて、これに勝るものはない。何もかも貴きエス君のお蔭である。9時から10時半までは、『詩篇』と『新生命』と『宗教と現世』とで過ぎた。これから寝る。正に11時10分前。

人の妨害のあらざる限り、この間建てた日課(日々の規則)は無理でない。

この夏、軽井沢で良書を求めて置いてよかった。教文館も丸善も焼かれては、ちよつと得られないからである。多くの貴重なる書籍の焼かれたのは惜しいことである。

○1923年9月19日(水)

晴。起床7時。朝食が美味しい。人は神の賜う日々の糧食にどうして感謝しないのだろう。不平、不足の語が多い。学校は愉快だ。グンデルト先生は熱心だ。暮口を教室に忘れて行かれた。持って行って上げると、驚いていた。今日もよい天気である。運動したかったが、する道具と相手が居ない。入浴した。夕食後、3人で散歩した。

月夜、星を仰ぎて静けき祈祷を捧げた。9時。

今の学生(高等学校生を見て)は、宗教に無関心である。神の事について全然無関係である。神とは、僧の云うこと、しゃれ、つくろいの言であるに過ぎないとしている。まさかの時の体裁の言葉としか思っていない。洋書を読んでGodが出て来ても一向かまったことはない。「かみ」は「かみ」それつきりである。なさけないものとして今の学生の如きはない。やれ、何々哲学とやら、何々主義とやら、何々論とやら、何だかんだと、偉そうなことを口走る。真面目さ、敬虔の念というものは毛ほどもない。高慢、驕慢、そればかりである。食のことと、金のことと、Impure「不道德な」なことは彼等の常に口にするところ。到底、おはなしにならぬ。

「学生は少しく学問をすれば直に生意気になる。同時に懶ける学問を継けたさに、主義を売り、独立を捨てて。社会の狀態に省み、己れの地位の安全を計らうため、万事に注意深くなりて、言つべきことをも言わず、言つべからざることをも言つよつになる。学生の最大多数は少しかりの学問と身の快樂とのために己の自由と靈魂とを売るものである。今の社会に於て最も unheroic「非英雄的」なるものは学生に多い。深く今の学生の腐敗墮落を見る。」

内村先生の言、真に然りである。学生たる自分、先生のこの言を聞いて、怒らんとしてみても怒ることが出来ないのは、「実に然り」と云うものがあるからである。

今日、学生の不敬虔、不真面目、懶惰、不潔を切に感じて記すわけである。机上を守るルーテルよ、我をして確く基督イエスによりて歩むべく祈り給はんことを。



○1923年9月20日(木)

晴、夜細雨。秋風は次第に訪れて来る。秋の虫の声はさかりである。天然の音楽の妙味はここにある。毎日毎日、虫の声の調和を讃える。而も讃め尽くせない。学校へ行く道に、陸穂^{おか}が実っている。茄子が光っている。枝豆が茂っている。桑の林がある。ゴマが成長している。薩摩芋の畠が盛んである。里芋の葉が見事である。空は碧色鮮やかである。空気は清浄である。高等学校へ通う道が之である。何と有難いことではないか。無味な教授を受けても、之があれば気分は爽快である。高等学校の先生はどうしてあんなに、無味乾燥なのかと怪しむ。自分も面白くないし、生徒も面白くない。お役目的の教授である。これが高等教育と聞いて涙がこぼれる。先生と生徒との間に愛が流れない。教室は冷たい。

ノート(筆記) ほど馬鹿らしいものはない。時間も労力も大である。効も少ない。それよりも更に如何なのはその時間の無意味なことである。知識を得ればそれでよい、と云うのが学校ではない。学校は、「修身」以外の時間が勿論大切なのである。修身は少なくとも、今やっている修身は、お説教位に思つて沢山かも知れない。学校は、学校そのものが貴いのである。先生と生徒が一教室に居るときに貴いものがあるはずである。精神の籠もらざる知識は一時的である。死せる骸である。

自転車を駆つて愉快であつた。キャッチボールもした。入浴は毎日の様になっている。運動の後、入浴して、縁側に裸体で涼む心地は何とも云えない。その中に日が没する。虫の声は、四囲が寂寥に帰るに従つて、冴えて来る。

夕食は特別美味しかった。三度三度の御飯を美味しく食せんためには間食せざるに限る。秋は人も肥える。

内村先生の本は何時読んでも気持がよい。面白い。飽きない。有難い。同感同感である。青線青線である。何度読んでも宜い。こんな好い友達は居ない。先生と霊的交際をなし得る嬉しき、感謝なることよ。この愉快を隣りに坐っている四郎ちゃんや宣ちゃんに知らせやりたいものだ。言つたところで解らないと思えば悲しくなる。況^ましてこの歓びを共にすることは到底出来ぬ。基督の真面目な僕^{しもべ}となつてくれ給え。それは実に易きことである。赤兒の心に帰り、天然自然の兒に帰ればそれでよいのである。心、この状態となれば、基督を信じ、受けることは何でもないのである。

君等の心に悪魔の知識、習慣、嗜好、快樂、欲望がここまで根ざしているので、それで誠に困難なのである。これを、覆す良心に望みを託するばかりである。天賦の良心である。天然の心である。赤兒の心である。

○1923年9月21日(金)

晴後雨。学校へ行く。一先生が休まれたため時間繰り上げとなつて、2時20分の汽車で帰京することが出来た。しかし途中、強烈な驟雨に襲われてビショ濡れになった。車中少



し寒くて困った。隅田川を渡ると暗澹たる東京市が眼界にひろげられた。天災の跡は未だ惨たるものである。灯火が淋しい。日暮りに着いたのが7時5分であった。新宿まで省線電車で来れたのは有難かった。新宿下車、寒いのであたたかい晚餐を軽く認めた。徒歩で武田に行った。叔母様は痔病で弱って居られた。お気の毒であった。兄上も帰って来ておられた嬉しかった。母上も喜んで出て来られた。

○1923年9月22日 (土)

晴。天は兄の死の日、今日の昨夜から、僕と共に泣いて下さった。雨は物淋しげに降っていた。今朝も暫し降り続けていた。お供えのお饅頭を買いに行った。片瀬饅頭に酷似しているので懐かしく思われこれを購ってきた。

お墓参りに家を出たのは10時であった。万世橋乗り換え巣鴨行に乗って終点まで行った。お花を買ってお墓へ着いたのは正11時であった。白菊、黄菊を賑やかに手向けた。お墓は整頓してあった。地震に倒壊しなかったのはよかった。正11時は、2年前、兄上が米国へ召された丁度その時である。深刻なる祈祷が捧げられた。涙はそぞろに降るのであった。

三周忌の日は遂に来た。そしてこれもすぐ過ぎ行く。兄上の夭折を悼んだ。兄上の敬虔なる信仰と絶倫の才能と偉なる身体とのために、殊にその早世を悼むの情は新たであった。しかし、神は悪戯を敢えてせられたに非ずと信じて得て有難かった。兄上の死期は天意であった。故に兄上は喜んで、望んで、信じてキリストの御許に走せた。これまた実に我がための、一基督教者の貴き犠牲の血であった。

讃美歌第368番を歌った。〔註：1954年改訂の讃美歌では第488番「はるかに仰ぎ見る」〕

なみだもあとなく よろこびつきぬ

かがやくみくにに 住むよしもがな

たへにゆかしがる あまつみうたを

ともに歌ふ日の 待たれぬるかな

父なる御神の 招き給へば

みもとへゆくみを ひきなとどめそ

創世記第1章を読んで戴いた。ローマ書第7章、第8章を読んで戴いた。兄上の有難き聖書朗読であった。それから、讃美歌第456番〔註：改訂の讃美歌第320番「主よみもとに近づかん」〕を歌って、希望に輝く将来を待ち望んで、「兄上よ待たれかし」と叫ぶのであった。僕の使命はこれからであります。

墓地に、逝きし兄の許に静けき感謝なる時を過ごすこと30分余りであった。手向けの花に蝶が舞って来た。墓地は人一人通らず、いと寂かであった。満2ヶ年は遂に来った。三周忌。兄と僕との間は、時の経つにつれて、より太き紐によって繋がれている。これほど心強いことはない。帰宅、お座敷に写真を飾った。青木の叔母様、実さんが居られた。後

から三弦さんと泰ちゃんが来られた。共に祈祷する人はしかし居なかった。兄上を本当に知って下さる人の一人でも彼等の中から出でんことを切に祈る。兄を知らんためには基督者、敬虔なる基督者たらずんば恐らく難しからんと思われる。リビングストンの事業がわかり、ルーテルの精神がわかり、クロムウエルがわかり、ゴルドンを知り、グラッドストーンの心を知り得る人でなければ、小さな僕の兄をさえ知ることが出来ないのである。空の小さき星を、地の小さき鳥、小さき花、小さき草に宿る所の天然の心に酔う人ならではない。

○1923年9月23日 (日)

雨。本当に秋の気候になった。昨夜から腹痛みを起こした。全く僕の罪よりする腹痛みで一言もないわけだけでも。人は、帰京の際、雨に打たれて冷えたのであると言って下さる。しかし過食とほか信ずることの出来ぬ自分にとっては、人言は如何にもあれ、神に對して深く謝罪の告白をなさねばならなかった。過食の罪、Eat to dullnessをやったわけであつた。神の罰は忍んで受けねばならなかった。否、感謝して受けるの心にさえなれて有難くある。

基督、我が罪のために、と十字架を仰ぎ瞻て、心は感謝と慰安に充ちて安らかである。神はこれを赦し給い、浄め給うこと明瞭であることを解らせて下さり、更に安らかである。

辰雄、この罪の塊の辰雄、いくじなき辰雄、だらしなき辰雄、こんな虫けらは死んでしまえと自分で自分に言いたくなる。しかし、罪を何回となく繰り返すにも拘らず、神はより深く僕に臨み給いで、危なければ危なきほど強き御力をかし給う。聖霊を強く宿らせて戴き、ここに奮然として立たん。

床中にて「グラッドストーン」の伝記を読み、偉人の感化は大であつた。偉人はその根底に己れならざる絶大の力を有している。

○1923年9月24日 (月)

降雨烈、風寒し。初冬のような日、今日も断食に近かつた。兄上は相変わらず、戒厳令が敷かれている故、警備の任にあたつて居られる。軍隊の守備によつて我々は安眠している。あわれむべき東京市民である。武力の保護による中は、平和はなかなかである。しかし軍隊、兵隊さんの勤務一方ならざるを知つて、彼等に感謝する。彼等の待遇のあまりよからざるに返つて彼等に同情する。兵隊も人である。奴隷ではない。彼等は絶対服従を命ぜられてゐる。社会はそれに馴れて彼等と遇する余りに薄情冷淡である。

露国の革命は何を起因とするか。若し日本の兵士にして社会制度に反感を抱かんか。その氣、鬱積せんか。日本国は之より危なきはないのである。職員等の月給と仕事を工兵隊のそれに比して見よ。如何に是等工兵隊兵士等の薄給なる。金銭上、言うのではない。兵



士等を重んぜよと云うのである。そうすれば自然、こんなことでは気の毒であるという情が湧くことと思う。これがなくては上下の和平はない。冷情それから不和混乱、これは決まりきっている。その時はこれが改められぬ以上、早晚来らざるを得ないのである。

○1923年9月25日 (火)

晴。お昼、お粥を戴く。晩もお粥にお副食物^{かず}少し。元氣回復した。

○1923年9月26日 (水)

晴、満月。御飯になって嬉しかった。お昼はお粥。元氣にまかせて、運動をやりすぎた。最も悪かったのは、庭の木の枝は斧で斬ったことである。力が相当要った。木は泣いたことだろう。あんなに多く斬ったことは確かに無茶、無思慮のことと言わねばならぬ。

今夜は満月、母上をお伴れして神楽坂の方まで散歩に行った。あまり気の進ませられぬ母上をお伴れしたのも罪であつた。

○1923年9月27日 (木)

晴。何だかだるい。食欲減退。午後から床に就く。昨日のオーバーワークの天罰^{てきめん}は覲^な面^めに顕^あわれた。癒^なつたと思つて不十分なところへ無理をしたからである。当然受くべき神の処罰である。はやまったことを悔ゆるは愚かである。有難き御試練と思わねばならぬ。弱き、愚かなる我は、聖霊を放れて再びかかる不注意をした。肉につけるものの弱さをしみじみと感じた。

○1923年9月28日 (金)

雨。十五夜の晩には、一家揃つて、枝豆を食べて居られた。林町の昔が偲^{おも}はれて慕わしかった。僕の口には入らなかつた。涎^{よだれ}は垂れなかつたが。この際にも、月見の団子が売り切れと聞いて、人の心の左まで荒^{すさ}んでいないのを喜んだ。

○1923年9月29日 (土)

晴曇。流動食で終日寝ていた。三弦さんが診察に来て下さった。

○1923年9月30日 (日)

晴。秋になった。夏は全く去った。寝ていると虫の音がよい。宣ちゃんが水戸から帰つて来て見舞つてくれた。武田の叔母様からカステラのお見舞を戴いた。今日はお粥を戴いたところ、痛んで下った。ゴルドン將軍伝を繙いて、彼に励まされるところがあつた。